

# 踊子とカメラマン

1960  
作品ナンバー0034

華やかにみえる踊子の地味な生活、それにひかれて仕事の鬼といわれたカメラマンが戦災で別れた踊子の両親を捜しだす純情物語。



劇  
35ミリ  
白黒／48分

■企画  
貯蓄増強中央委員会

スタッフ

■製作  
村山英治  
■脚本  
池上金男  
■演出  
芝丘 弘  
■指導  
小田基義  
■撮影  
木塚誠一  
■音楽  
岡田和夫

■出演  
瀬良 明  
青江奈美  
笠間雪雄  
日恵野 晃  
他

庄司は、楽屋に踊子のさなえを訪ねた。「朝7時に起きて自炊して、掃除に洗濯」という話に庄司は、一見華やかな踊子の生活が、案外地味なのに驚いた。庄司は割烹着と舞台衣裳のさなえの生活は日曜版のカコミ記事にうってつけだと思ったが、あっさり断られてしまった。だが“すっぽんの庄ちゃん”という異名をもつ庄司は、翌朝さなえのアパートを訪ねた。さなえも庄司の熱心さに兜を脱いだ。庄司は、1間きりだが小綺麗に片付いた部屋に感心し、「小父さんも一緒に食べてね」というさなえに、つい朝食まで御馳走になってしまう。女房に死なれ子供もなくした一人暮らしの庄司にとって、久しぶりにうまい味噌汁だった。

庄司は、さなえが戦争中両親と別れ別れになって恵風園という孤児収容施設にいたことを聞き、さなえと一緒に園を慰問した。庄司は、当時のさなえのことを尋ねるが、母親の名がたねということしかわからなかった。さなえが園に来たときの持ち物の中から太宰府のお守りをみつけ、九州へいけば手がかりがあるかもしれないと庄司は思う。部長を口説き、気負ってさなえの母親捜しに出かけたが、足を棒にした2日間も徒労に終わった。翌日は部長にいわれた炭鋤町の写真を撮るため近くの炭鋤町を訪ねた。ポタ山をバックに構図を考えている時、落盤事故を告げるサイレンの音で町が騒がしくなった。庄司は坑内に閉じこめられた組長の妻が木崎たねということを知り、空襲で早苗という子供とはぐれたことも聞く。庄司は帰京し、さなえのいる楽屋へ向かった。